

芥川だより

発行日 * 2023年8月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



ウクライナ戦争で労働強化が進んでいる

遠い他人ごとのように思っていたウクライナの戦争が私の生活にも脅威を与えだした。あくまで私の推理なのだが、軍備拡張の約束だけをして財源は棚上げ、なんとも無責任な国会だ。そこで行政府の地方機関は、何が起きるか分からないが「とにかく節約を！」というあてのない政策に舵をきった。インフラ設備の工事などを節約し公共事業費の削減を始めた。

工事現場の仕事が3月ごろから減り始め年度初め頃から激減した。工事件数が少ないうえに、警備員の数も減ってきた。3人必要と思われるところでも2人。警備員だけではない、作業員数も少ない。もう一人いれば余裕をもって時間内に仕事を終わられるのに、その一人がいない。休憩時間無しでの突貫工事になると作業員だけではない、警備員も休みなしになってしまう。

39度の炎天下で作業するのも大変だ。立って交通誘導をしているだけの警備員も見た目以上に大変だ。ちょっとしたスキに歩行者や自転車が通り過ぎる。意外と思えるが、通行止めをしても通り過ぎていく奴はいる。宅配業者や郵便屋さんたちは必死で走り回っている。不在宅が多く何度も行かなくてはいけない。一日に配達する件数が100件を超え14時間ほどの労働時間になる時もあると言う。異常だ！と言ったら笑われる。足場職人の労働時間と労働内容はさらに想像を超える。朝4時には起床し資材置き場へ行きトラックに積み込み現場へ8時に行きすぐに働きだす。ほんとうに分からなくなるほど働き通す。

私の警備の仕事も最近きつくなり、休憩時間もなくなり立ち続けなければならなくなる、異常な時代が来た。

死をめぐるあれやこれ(105) 石川 吾郎

猛暑と風水害の夏に思う

今年の暑さは近年以上の激しさで、昼間に外出をするだけでも危険な状態が続いている。この気候で農作物は大丈夫なのだろうかと考えていると、ニュースで食料自給率がカロリー的には三八%しか達成されていないのだそう。今は世界的な異常気象とウクライナ戦争による穀物の不足で、食料の奪い合いです。◆食料の確保は、国の最大の安全保障といっている。食料を輸入にたよれば、当然相手国の事情によって食料確保が左右され、場合によっては国民が飢餓に苦しむことになる。歴史を見ればこれはよく起こることだ。世界の多くの国とくに欧米の先進国は農業の保護に力を注いで、農家に対して手厚く補助をしているという。これは食料の確保とともに国土の保全に寄与するからだ。◆しかし日本国の政府は、食料安全保障を本気で取り組んだ形跡は残念ながらない。この自給率が上がらないことが何より証明している。歴代の自民党政権はいったいどれのために政治を行っているのだろうか。特殊な高級食品の輸出には力を入れているようだが、国民の基本的な食料の確保という観点からは、ほとんど何もしていないに等しい。◆そういうえば、健康への危険性から世界の各地で禁止になっている除草剤グリホサート(ラウンドアップ)の残留基準を百倍まで緩和して、日本のホームセンターで簡単に入手して使えるようにして

海外の巨大企業に貢献しているのが日本政府だ、ということ国民は覚えておいたほうがいいだろう。

素老人☆よもだ帳 (113)

坂本 一光

◆人間であることの何かに心留め

広島に原爆が投下されてから七十八年目の八月六日、広島市平和記念式典が開催され約五十万人が参列した。

広島市長、広島県知事は「核抑止論」を明確に批判。国連事務総長も寄せたあいさつの中で、「核のリスクを排除する唯一の方法は廃絶」であると表明した。一方、岸田首相はいさつで、「核兵器のない世界」を言いながら相変わらず、核兵器禁止条約にも核不拡散条約にも一切触れなかった。人間であることの何かに心を留めるという意識が、日本の政権関係者には感じられない一幕をまた見てしまった。

以下に、広島市長の「平和宣言」の一部を紹介する。

① 七十八年前の原爆投下の日を、まるで生き地獄のようだったと振り返る当時八歳の被爆者は、「核兵器を保持する国の指導者たちは、広島、長崎の地を訪ね、自らの目で、耳で、被爆の実相を知る努力をしていた。きたい。あの日、熱線が灼かれ、瞬時に失われた命、誰からも看取られず、やけどや放射能症で苦しみがから失われていった命。こうして失わ

れた数え切れない命の重さを、この地で感じてもらいたい」と訴えています。

② 本年五月のG7広島サミットで各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、こうした被爆者の願いが各国首脳心に届いていることの証しになると思います。…こうした中、G7で初めて「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が独立の文書としてまとめられ、全ての者にとつての安全が損なわれない形での核兵器のない世界の実現が究極の目標であることが再確認されました。それとともに、各国は、核兵器が存在する限りにおいて、それを防衛目的に役立つべきであるとの前提で安全保障政策をとつているとの考えが示されました。

しかし、核による威嚇を行う為政者がいるという現実を踏まえるならば、世界中の指導者は、核抑止論は破綻しているということ直視し、私たちが厳しい現実から理想へと導くための具体的な取り組みを早急に始める必要があるのではないでしょう。市民社会においては、一人一人が、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」というメッセージに込められた人類愛や寛容の精神を共有するとともに、個人の

尊厳や安全が損なわれない平和な世界の実現に向け、為政者に核抑止論から脱却を促すことがますます重要になっていきます。

③ 日本政府には、被爆者をはじめとする平和を願う国民の思いをしつかりと受け止め、核保有国と非核保有国との間で現に生じている分断を解消する橋渡し役を果たしていただきたい。そして、一刻も早く核兵器禁止条約の締結国となり、核兵器廃絶に向けた議論の共通基盤の形成に尽力するために、まずは本年十一月に開催される第二回締約国会議にオブザーバー参加していただきたい。また、平均年齢が八十五歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面でさまざまな苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆七十八周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々とともに力を尽くすことを誓います。

最後に、人間であることの何かに心を留め、誰もが平和だと思える未来の実現を訴えたのは、広島こども代表に

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 105	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 113	坂本一光	2
哲学翁いの時事放談 63	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 69	下村嘉明	5
新型コロナウィルス愚考	明石幸次郎	5
その 34		
オクラの山たより 82	因了生	6
支離滅裂 近未来予想	y・s	11
隠された歴史 58	満田正賢	12
道を行く 四二	成瀬和之	14
俳句	影山武司	18
編集後記	S K生	19
ふみの道草 62	山椒魚	20

芥川だより一九九号 目次 ページ

よる「平和への誓い」であった。

平和への誓い

広島子ども代表

小学校六年 勝岡英玲奈

小学校六年 米廣 朋留

みなさんにとつて「平和」とは何ですか。

争いや戦争がないこと。

差別をせず、違いを認め合うこと。

悪口を言ったり、けんかをしたりせず、

みんなが笑顔になれること。

身近なところにも、たくさん平和があります。

ります。

昭和二十年（1945年）八月六日 午

前八時十五分。

耳を裂くような爆音、肌が焼けるほどの

熱。

皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川

面に浮かぶ死体。

子どもの名前を呼び、「目を開けて。目を

開けて」と叫び続ける母親。

たった一発の爆弾により、一瞬にして広

島のまちは破壊され、悲しみで埋め尽く

されました。

「なぜ自分は生き残ったのか」

仲間を失った私の曾祖父は、そう言って

自分を責めました。

原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深

い傷を負わせ、生きていくことへの苦し

みを与え続けたのです。

あれから七十八年がたちました。

今の広島は緑豊かで笑顔あふれるまちと

なりました。

「生き残ってくれてありがとう」

命をつないでくれたからこそ、今、私た

ちは生きています。

私たちにもできることがあります。

自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを

考えること。

友だちのよいところを見つけること。

みんなの笑顔のために自分の力を使うこ

と。

今、平和への思いを一つにするときです。

被爆者の思いを自分事として受け止め、

自分の言葉で伝えていきます。

身近にある平和をつないでいくために、

一人一人が行動していきます。

誰もが平和だと思える未来を、広島に生

きる私たちがつくっていきます。

（かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人

「哲学爺い」の時事放談（63）

祖蔵 哲

「非対称の哲学」

ウクライナの戦況は相変わらず膠着状

態にある。ロシアは国際社会で非西諸

国、特にアフリカ大陸の国々に対して取

り込みに必死である。かの大陸はかつて

西欧諸国の植民地が多く、過去の支配に

反発している国はロシア寄りを表明して

いる。さらにロシアは一方的に穀物輸出

合意の履行停止を宣言し、ウクライナか

らの運搬ルートを遮断することによって

食料危機を作り出している。これに先立

ち、アメリカもウクライナにクラスター

弾の供与を発表した。クラスター弾はか

つてベトナム戦争で使われた無差別兵器

の一つであり、不発弾が地雷のごとく地

上に残ることからオスロ条約で使用や生

産が禁止されている。世界100ヶ国超が

同条約に加盟しているが、アメリカ、ウ

クライナ、ロシアらは加盟せず人道上の

問題に目をつぶっている。こうしてみれば、この戦争、冷戦期にかつて幾度も行

われた東西代理戦争と同じパターン。戦

場となった国ではあらゆる合法的悪が試

されている。

戦争という異常状態と同じく地球温暖

化による高温はこの7月にピークを越え

た。記録を取り始めたのは1940年以

降だが、樹木の年輪やサンゴ礁、深海の

堆積物などから抽出した気候データをも

とに推定すると、地球がこれほどの暑さ

になるのは12万年ぶりだと指摘してい

る。まさに異次元の異常現象である。国

連のグテーレス事務総長は、「地球は沸騰

化の時代」に入ったと述べた。

さて、今月の時事テーマであるが、そ

の事件は国内の取るに足らない事象、大

手中古車販売による保険金の不正請求問

題からである。知つてのとおり、従業員

が車を故意に傷つけ修理代を水増し、保

険会社から保険金を不正に請求していた

問題である。その会社は従業員に対して

修理代を稼ぐようノルマを課しており、

事実上組織レベルの不正だったとされて

いる。預かつていた車を故意に傷つける

など非常に悪質な面があるが、そこまで

しなくても、こんなことは陰にかくれて

やっているのではと普段も何となく思っ

ていた。それはこの問題が本質が個人や

組織でなく資本主義の本質にあるからだ。

その資本主義の一つの本質概念が今号の

テーマ「非対称」である。

（1）経済の非対称「レモン市場」

もとより爺は哲学が専門で経済学に

は明るくないが、専門家によるとこの事

件はまさに「アカロフのレモン市場」の

ことだと言う。G・アカロフとは2001

年にノーベル経済学賞を受賞したアメリ

カの経済学者である。その内容は、こう

である。一般に中古車の市場では、買い

手は車の品質を判断するのが難しい。売り手は、その車が事故に遭っているかどうかなど、実際の履歴について知っている場合が多い。その結果、買い手と売り手の持つ情報に偏りが生じる。このような状態を彼は「情報の非対称性」と言っている。ちなみに「レモン」とは、アメリカのスラングで買ったあとに欠陥が見つかる中古車を意味する。果物のレモンは厚い皮に覆われていて、外からその鮮度や品質を判断することが難しいこと由来するという。レモンに対して、見た目からもよさのわかる品質のよい品は英語で桃を表す「ピーチ」と呼ばれている。

さて、この「情報の非対称性」は、資本主義経済では普通に行われており、むしろそのことにより経済が活性化することもある。つまり、市場の自由に任せておくほうが良いという見解である。しかし、この状態は「悪貨は良貨を駆逐する」というように、利益優先の結果、粗悪品が市場を占有してしまい、全体の効用は低下することになる。そして資本主義自体が成り立たなくなる。こうならないのはどうしてか、資本主義の父、「国富論」を著したアダムスミスはこの問題を「道徳感情論」のなかで「同感」の概念で説明している。「同感」とは人間は極端な行為をすれば排除されるだろうという「道徳感情」のこと。しかし、現実には「モラルハザード」が起きている。自分だけはばれないという道徳崩壊である。

この「非対称性」を防ぐには「売り手」と「買い手」の間に「仲介」を置く必要がある。この事件の場合は「売り手」の情報公開を制度化することである。これは「神の見えざる手」ではなく人間による「情報弱者保護」であり、「規制」である。資本主義経済はなるほど「自由」が基本になっているが、「勝手気まま」の自由ではなく「自律」した「自由」が必要なのは言うまでもない。人間は動物とは異なり「理性的」であり、「弱肉強食」の世界に生きているのではない。

(2) 「対称性」とは

対称性とは、左右反転や回転という変換を適用しても変わらない性質のことをいう。これは二次元の「面」を含む「空間」のことと解されるが、「時間」に関しても「対称性」が言われることがある。つまり「時間の非対称性」のことで、「過去」と「未来」の非対称を言う。しかし、これは「時間」を「時間の矢」直線的な流れとして「視覚的」「空間的」にとらえている「変換可能」を前提しているためであり、「時間」は対称性を問うことは本来できない。

一般に空間的対称、シンメトリーは「美しい」の象徴であり、西欧美術では美の基本とされる。しかしながら、日本など東洋の美は「乱れ」や「ずれ」にもとめられ「非対称」が美になることもある。であるから「対称性」は必ずしも普遍で

はない。

さて人間世界はどうであろうか。人間はすべて平等である、というスローガンがあるように、どうも本来の人間同士は「非対称」であるようだ。それらの不調和、格差が「紛争」や「闘争」「戦争」を生み出している。そして資本主義経済ではそれが市場拡大の原動力になる。

(3) 自然は対称、非対称？

様々な自然科学書を読むとどうも自然界は「非対称」でできているらしい。人間の身体やDNAの構造なども非対称である。そういえば「左右対称」という場合のそもそも「左」とは何かを定義するのは非常に困難である。「左は右の反対」と答えてみても堂々めぐりに陥るだけである。ちなみに、ヒダリの語源は「日の出」からきており、「南を向いたとき東にあたる方」という意味らしい。朝起きて南を向いて立ったとき、朝日の昇ってくる方向が左である。しかし、この定義でも、左右を知るには南北の違いが分かっているなければならないことになる。日常的に経験する現象から左右を定義するのは不可能であるにも拘らず、如何なる場所においても、我々が左右を正しく認識できるのは、我々の体の構造が本来左右非対称だからである。我々は自らの非対称性から、左右を認識しているが、非対称性の一つに利き手の問題がある。人間の体のつくりの非対称性は内蔵を

見るとはつきりする。心臓が左にあるため、バランスを保つために、右肺は三葉で、左肺は二葉である。また、胃や腸の形も明らかに非対称である。脳は形の上では左右対称に近いが、その働きは左脳と右脳と異なる。我々が左と右をすぐに認識できるのは脳の非対称性に負うところが大きい。このように自然は「非対称」で構成されている。

(4) 論理の非対称

原因結果の因果関係は「非対称」である。コップを落とすと壊れる。コップが壊れたという「結果」は、落としたという「原因」からくる。これは入れ替えられない「非対称」である。このような時間に関係する論理はすべて「非対称の論理」になる。これも時間という自然の非対称性から派生する思考の非対称である。

さて、その他の非対称論理で有名なのは「検証と反証の非対称性」である。これはK・ポパーが用いた科学哲学上の用語であり、反証主義の核に位置する概念である。命題（真偽が決まる問題）の真偽の判定には以下の二種がある。「検証」呼ばれるその命題を肯定する証拠を出す場合。もうひとつは、「反証」で、その命題を否定する証拠を出す場合である。検証には対象となる範囲の全ての証拠が必要であるが、反証にはわずかな証拠で構わない。これを「検証と反証の非対称性」

と呼んでいる。

例えば「すべてのカラスは黒い」という命題を肯定するためには地球上のすべてのカラスを観察して黒いことを確かめなければならない。しかし、それを否定するには一羽でも黒くないカラスを見つければ済む。「すべてのカラスは黒い」という定義を固定すると「演繹」に使える。しかし、これを仮定すると「帰納法」として使える。ポパーはこの考えから、「カラスは黒い」を科学として使う場合、「反証」つまり「反例」が見つかるまではその確実性が高いとした。つまり「非対称」が真理に近いという論理である。

その他、私たちは論理についても「対称性」が真であるとの思い込みがあるが、その隙間をついた「非対称」の論理がそのような常識を崩し、さらなる人間の思考を深める役割を果たしている。

「倫理」に関しても「非対称」を問題にしているものがある。有名なところはベネターの『反出生主義』における「利益と害の非対称性」である。これは今生きている人と将来生まれるであろう人の「利益」と「害」の「良い―悪い」を比較して、「生まれてこない人」のほうが優位であるという理屈から「生まれないほうがいい」という結論を導くものである。常識的には問題の多い考え方であるが、彼は日常の我々が意識しない「非対称」が本質的な人間の在り方であるという論点からこの理論を擁護している。「ほら、

皆も本当はこう考えているんだよ」というわけである。この例も世界は「非対称」で存在していることになるようだ。

さて、今月は「非対称」を哲学した。そういえばウクライナ戦争をはじめ、各国の紛争は東西問題とか、グローバルサウス問題など格差というその非対称性から起きているものが多い。自然は本来なら非対称であるから仕方がないのか。そうではない。人間は「理性」という非自然を持つている。いや、この「理性」も人間という自然の一部から来るものである。そこには「対称性」を理念とする思考があり、混沌する自然世界を認識し行なう力がある。ただしそれは単独で行なうのではなく、複数の人間が共同で行なうのみ可能な達成目標である。自然は非対称だからこそ、対称性を目指して進化するのである。

大峯奥駈道 (69)

下村 嘉明

体験型人間学 19

初めての現場へは、早く行き周囲の状

況を確認する。トイレや公園、コンビニなどがあるかないか。昨日、ある警備会社の下請けで現場に行くと他の警備会社の人が来て二人でいろいろと話した。彼の会社にもどうしようもない警備員がいて怒鳴りまくっていたが、5年前に退社し、ほっとした話や。舗装工事会社の作業員のやくぎ以上のワルが二人いて、工事の近所から苦情が絶えなかったとか。

あるとき、小学校の横を走る工事では、学校の先生から、「子供たちに聞かせたくない言葉が大きな拡声器で聞こえてくるので辞めさせてほしい」と苦情があった。

ワルの重機には、拡声器が取り付けて合つて、がなり立てていたという。類は友を呼ぶと言いが、似たようなワルがこの会社には2人いた。ワルいのがいるとこへは、ワルいのが集まるんやね。やっぱり、この会社はつぶれて消えてしまっただけ。

久しぶりに、面白い話が誰に遠慮するわけでもなく自由に聞いた。二度と会うことが無いから、好きな事が言える。またいつか会って話を聞きたい。

しかし、彼が、最後に言った言葉は、心に残った。

「どんなワルい奴でも、自分がやるべきことをしっかりしておれば、何も言わない。やらないから、怒鳴り倒すんだよ」

新型コロナウイルス禍愚考 (その34)

明石 幸次郎

昨年末、60歳代の女性相談者からの、問いに対して瞬間的に答えてしまったことが、その人にとって心に響いた内容であったかどうか、いまだに、引っかかっている事があります。

それは、女性が話の最後の方で「幸せは、どうしたら得られるのですか?」と言われた問いです。電話でのやり取りで今までの話の流れもあるので、コンビニでのホームレスのおばあさんとの出会いを相談者が冒頭に話しておられたので「幸せは、人からは中々持ってきてくれません。自分で感じるものと違いますか?例えば、何かしたあと、コンビニで100円のコーヒーと120円のパンを買って公園のベンチで座り、そのコーヒーを飲みながら、パンを食べ、ふと空を見上げ、何かを感じる。その瞬間にでも幸せやな、と感じることが私があります。ちよつとしたことでも、いいな!と思うことがありますね。幸せを感じるのはいかいいなあと思う自分の気持ち、気持ち次第ではないですか?」と言うような応え方をして、相手はどう受け止められたか?「分かりました。有難うございました」と言う事で、話を終えました。その時は、少しでも幸せを相手が感じるやうな方を話したつもりでいましたが、改めて

自分自身「幸せを得る、感じる」とはどういうことで、どういう状態を言うのか。自分が自身もよく分かっていないのでは、と思い愚考するに至りました。

幸せ（幸福）でありたい、得たいと思ふその術や、生き方の指針を求めらるならば、「幸せ（幸福）とは何か」と言うことを考えなければとは思ひながらも、今更、この歳になって明日にでもコロッと逝ってしまうかも知れないのと思う気持ちもあります。しかし、かの哲学者は「生きていく限りこの問いに向き合い続けなければならぬ問いであり、その問いにこたえることは、容易ではない」と言っておられます。偉い哲学者の先生でも容易ではない問いにボケ始めた私がどう考えるのか？

まず、少なくとも今は、不幸と感じていない自分がいます。その不幸を感じていないのは、取り敢えず、三度の飯が食え、健康で、年金があり、家があり、多少の貯蓄と伴侶と子供、孫が元気でいます。これが、幸福と言えはそれで、これらのうち一つでも欠ければ、たちまち不幸と感ずるであります。自分にとつては、当たり前で、幸福は空気のようなものです。空気があることを普段は意識することが無いように、幸福であるのにそのことに気づいていなかったのです。三木清は、人は幸福になるのではなく、幸福であるのです。そのことに気づくことが幸福になるといふことだとも言っています。

このことは、私は、電話を掛けて来られた女性に問われて、改めて考えたお陰で幸せとは何かに気づかされたようなものです。改めて、女性に感謝です。

又、幸せとは何かを、橘玲さんが「幸福の資本論」という本の中で言っています。金融資本、人的資本、社会資本を幸福の土台（インフラ）として、この条件が（ある程度）が揃った状態を「幸福」と定義しています。本人が自分は不幸と思つていてもこの三つの資本を持っていればそれは、幸福なのだと言っています。

では、私が電話を受けた女性は、曰く家もなく、生活保護も認定されなく、事情で夫から逃げて来たので家族は娘さんはおられるようですが、金融資本ゼロ、人的資本ほぼゼロ、社会資本ゼロと土台がないようで、これでは幸福になる条件はほぼゼロです。そのような人に対しては、せめて憲法25条で保障された存在権としての生活保護を受けてもらい（本人は何ら事情があり受理されなかったよう）健康で文化的な最低限の生活（住まい、食事、健康を維持できる）が出来るよう更なるサポートをして、人的資本である娘さんとの関係に気づかせてあげて金融資本とまでは、無理としてでも、この二つの資本を得ることが出来れば、という条件でコーヒーとパンの話をすれば、良かったかなあと、反省しております。今更ながら、困った、しんどい人へ投げかける言葉の難しさと自己研鑽の必要性を感じています。

を感じています。

最後に幸福感を持っている人に共通する内的な特徴として、

- ・ 自分自身の事が好きである
 - ・ 主体的に生きているという感覚をもっている
 - ・ 楽観的であること
 - ・ 外向的であること
- と言われていますが、どうでしょうか？

オクラの山たより（82）

困了生

一

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨（そ）をば、づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いていた。

これは島崎藤村の小説「夜明け前」の冒頭です。よく知られているように「夜明け前」は中山道の木曾谷にある馬籠宿を舞台に明治維新前後の人びとの動きと彼

らをおおう社会全体の動向とを重層的に描いた作品です。

主人公青山半蔵は中山道馬籠宿で十七代続いた本陣の当主でした。半蔵は平田篤胤のおこした平田派の国学に心酔し、明治維新を迎えて待ちに待った王政復古の実現、理想の社会の到来を信じて歓喜します。しかし、現実に維新後にもたらされたのは文明開化の流れと江戸時代よりも苛酷な維新政府による人民への圧迫でした。時勢の流れに何度も裏切られ、ついには心を病んでしまう半蔵。閉じ込められた座敷牢の中で「私はおてんとうさまも見ずに死ぬ」と言い残して半蔵は死んでいきます。半蔵の悲劇的な死は庶民にとっては「裏切られた革命」であった明治維新に対する痛烈な批判でもありました。

では、半蔵を心酔させた国学とはなんだったのでしょうか。

国学は、教科書的にいえば中世以来の和歌研究から発展して中国文化の影響を受ける以前には日本本来の「いにしへの人の心」があると主張した学問です。国学者としては契沖、賀茂真淵、本居宣長が知られています。国学は後に宣長の門人と自称した平田篤胤によって平田派の国学へと発展していきます。平田派の国学は本居宣長までの国学の主流であった古語・古文辞の実証的な研究からはなれていき、我が国の古道が卓越したものであることと復古神道の立場を強調して政

道は神国の御風儀（風習）、「作法」という意味）にしたがって神慮によって世を治め、神を祭ることを第一とすべきと主張するようにあります。王政復古、祭政一致および復古神道の確立を目指すその主張は地方の豪農層や神主に広まって幕末の尊皇攘夷思想に大きな影響を与えました。

この平田派国学の地方への浸透ぶりは藤村の「夜明け前」にも次のように書かれています。

半蔵の周囲には、驚くばかり急激な勢いで、平田派の学問が伊那地方の人たちの間に伝播し始めた。飯田の在の伴野という村には、五十歳を迎えてから先師歿後の門人に加わり、婦人ながらに勤皇の運動に身を投じようとする松尾多勢子のような人も出て来た

ここに述べられているように幕末に伊那谷・木曾谷地域（現伊那市・木曾町）が平田派の国学が盛んであったことは事実で、たとえば明治初期までに伊那谷・木曾谷の両地域からの入門者は三百人を超えていました。また、「勤王ばあさん」と幕末の志士たちから慕われた松尾多勢子という女性も伊那谷に実在していました。

すでに江戸期後半の農村状況は何度か述べてきたことですが、今回は、平田派の国学とのかかわりからもうすこし述べ

てみようと思います。

江戸時代の後期ともなると新田開発は限界を迎えます。村は既存の耕地を維持するために耕作可能な範囲で村にある家の数を固定するようになっていきます。それを百姓株といいましたが、それが固定されると分家を作ることが難しくなります。家を相続できるのは基本的に一人であり、それ以外の構成員は養子に出るか、家を相続した人に隷属して「厄介者」になるしかありませんでした。では、町

に出るか。しかし、江戸に出ても町人による同業者仲間ともいえる株仲間があり、新規に参入することはまず不可能でした。すでに述べてきたように村から江戸に出て来ても奉公人、日用（日雇い稼ぎ）、棒手振（ほてふり）といったその日暮らしの生活で暮らしていくしかありませんでした。江戸つ子が「宵越しの金」を持たないのではなく、持ちたくとも持てないのです。「株」などの既得権益をもっている特定の富裕な家の人びとがいて、その対極には生まれながらにしてそういうラインからはずれた、その日暮らしの多くの貧しい人びとがいた社会。

それは江戸時代の民間社会の一面でした。こうなってくると若者が将来への希望を見出すのは少しばかり困難な時代となっていたといわざるをえません。こうなると若いエネルギーに身を任せ暴力的な道に進む者も多数でてきました。天保期には国定忠治、飯岡助五郎などの博徒

が多く活躍し、維新直前には尊皇攘夷運動に参加したり、新撰組を結成したりする若者も出て来ます。時の流れに共鳴し在地社会を飛び出して広い世界で活躍した彼らは暴力に依存して自己実現の道を選び多くはその中で死んでいきました。

もちろん、暴力に身を任せることなく村に残る若者も多くいました。しかし、社会全体が大きくゆらぎ、武力をもって百姓を治める「武威」と支配者は百姓の生活の安定を保証せねばならぬという「仁政」という二つの政治姿勢のバランスによる村落社会の支配という基本的な政治方針が大きくゆらぎ、律儀・節度という通俗的な道徳のもつ価値は大きく低下していつていました。たとえ律儀に働き節度を守って生活をしたとしても将来の展望は見えてきませんでした。飢饉となっても藩主からの救済は期待できせん。そうしたことから村に残った若者たちは遊興というかたちで自己主張をするようになります。村人たちにとって最大の娯楽は村の祭礼と村で行う歌舞伎興行でしたが、天保期以降は多くの村で若者たちがその担い手となっていきました。

こうした若者たちが限度を超えて好き放題をしはじめるのはいつの世でも同じこと。律儀・節度という通俗的な道徳を守ることは得られるはずの「よりよき未来」が期待できないならば、「我慢」「辛抱」という村の秩序や規範などに従う必要はないのです。在地社会に留まり、外

の世界に出て行けないとすれば、その中で遊興にあけくれるという刹那的な生き方へと流れて行くには当然でしょう。村に残った若者たちが昼日中から酒を飲んで騒ぎ農作業を怠けるようになっていったという動きは在地社会の秩序を内部から崩壊させかねないものでした。

伊那谷、木曾谷は伊那街道、中山道が通る交通の要衝でしたが、比較的小さな藩が多くあり、さらには尾張藩による木曾山林支配もあって統一的な支配がなされることはほぼ不可能でした。となればこの両地域の村役人や豪農たちは自力で村の秩序崩壊をくい止めねばなりません。両地域の村役人や豪農たちが平田派の国学に近づいていったのはこうした背景がありました。

では、村役人や豪農たちが平田派の国学のどこに魅力を感じたのか。平田篤胤は神の創った日本の優位性を語り、「御国（みくに）の御民（みたま）」という概念を創出し、日本という国の中心は「御民」、つまり百姓から成るのだ、と主張しました。この篤胤の「御国の御民」という考え方は「一君万民論」に近いといえます。この思想は在地社会の村役人や豪農たちにささやかな希望を与える政治方針となりました。すなわち、脆弱になった藩主に頼らずとも、村の中の百姓「御民」が、尊敬すべき天皇に直接つながって忠義を尽くすことよって在地社会の安寧はもたらされるのだという希望を在地社会の

村役人や豪農たちに与えたのです。

伊那谷、木曾谷の両地域での平田国学と在地社会の人びととの関係を詳細に研究した宮地正人さんは、開国以降、横浜での生糸貿易などにより利益を得た人びとが、幕末の政治混乱の中で、外圧への対処のあり方について自問自答しはじめ、平田派の国学に傾倒していったと分析しています。つまり、ペリー来航以後の政治・経済・社会の変化が、この山深い両地域の人びとの考え方を変えたというわけです。

「夜明け前」の主人公青山半蔵はこうした時代に中山道馬籠宿のリーダーの一人として生き、悩み、悲劇的に死んでいったのです。

二

さて、青山半蔵の時代から五十年以上さかのぼって小林一茶の時代です。この時期、在地社会に対する武威と仁政による支配にゆらぎは生じているとはいえず、まだ天保年間以降のような激しい動揺はありませんでした。また、このころは「一君万民論」を主張する平田派の国学はまだ盛んではなかったのですが、その一方で本居宣長の「古事記伝」に見られるような文献主義的な傾向の強いものが世に多く広まり、既に国学関係の書物、「万葉集」や「枕草子」などの注釈書も多く刊行されていました。

すさまじい読書家であった一茶はいまでもなく国学関係の書物もかなり読みこんでいたようです。一茶の日記にはしばしば読んだ書名や人と貸し借りした書名が記録されていますが、一茶が手紙のやりとりをした記録である「急通記」の一八〇一（文化三）年の記事には次のような記載があります。

一 『旧事記』『古事記』八冊

一 『和漢名数』一冊

一 『政談』八冊

一 『春曙抄』十三冊

一 『宝物抄』

右 小金可長へ遣（つか）はす

…中略…

九月十七日

一 書一通『東鑑』（あずまかがみ「吾妻鑑」と表記されることが多い）

木更津 雨十 祇兵子へ出す

「旧事記（くじき）」は平安時代前期の作で「先代旧事本紀」が正式名称で神代から推古天皇までを扱った歴史書です。

「名数」とは日本三景のように並び称される物や人物を集め、その集めた数を冠して呼ぶ言葉の総称のことです。「和漢名数」は中国や日本の古典などの中から数を交えた言葉を集め意味を解説した辞典です。

「政談」の筆者は元禄の儒学者荻生徂徠、「春曙抄」は北村季吟による「枕草子」

の解説書、「宝物抄」は鎌倉時代の仏教書の解説書。

この記事からは一茶は「旧事記」から「宝物抄」までを下総国小金に住む俳諧師可長に送っていること、そして、「東鑑」を下総国木更津の俳諧師雨十を通して同じ地に住む祇兵にも送っていることがわかります。

贈った相手は可長、雨十、祇兵でいずれも一茶が親しくしていた俳諧師ですが、日本の古代や中世を代表する歴史書や平安時代や鎌倉初期の有名な著作や歌集を求めに応じて送付しています。このことは送付する以前に一茶がこうした書物をかたり読んでいて熟知していたことを予測させます。

一八〇八（文化五）年には可長に「玉勝間」など三点を「二割引」で販売している記事もあります。「玉勝間」は本居宣長の随筆集で一〇〇〇項目にもなる考証・見聞などをまとめたもので国学者本居宣長の思想がぎっしりとつまった書物といえるものです。これを安価で売るといふ行為は一茶がすでにその内容を熟知していたということでしょう。

こうした国学の知識の獲得は一茶の俳諧にどのような影響を与えたのでしょうか。師匠の夏目成美と巻いた連句でつぎのやりとりがあります。

日本紀をひねくり廻す癖ありて 成美

松風聞くに三度旅立ち 一茶

成美が記紀や万葉集など国学で学んだ知識を題材に野暮な句を披露して風雅な雰囲気をつくらね、と国学好きの一茶を皮肉ってからかいます。これに対して一茶が大和の吉野まで風雅な松風を聞きにわざわざ三度も旅したことがあるんですよ、と応えています。なかなかの受けこたえです。夏目成美のもとに通っていた頃、一茶の古典文学や歴史書に関する造詣の深さとそれを句に詠みこんでいく習性は俳諧師仲間の内ではかなり有名であったようです。五十二歳以降になっても、この国学好きは変わることはなく、秋の田園風景を見て次の句を読んでいます。

① 天皇の袖に一房稲穂かな

文化十一年

② 天皇のたてし煙や五月雨

文政四年

①は百人一首にもある天智天皇の「秋の田の刈り穂の庵の笠を荒み我が衣手は露にぬれつつ」（『後撰和歌集』巻第六）の古歌を踏まえた句であり、②は民のために数年間わたって租税を免除した仁徳天皇が民の家々から煙の立ちのぼるのを見て我が民の暮しは豊かになったと喜んで詠んだとされる「高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどは賑わいにけり」（『新古今和歌集』巻第七）を踏まえた句です。一茶の国学

好きがわかるうというものです。

さらに、晩年の一茶がかつて強く心ひかれた思想は国学であったことを告白している次の文章もあります。

俳諧をさえずりおぼゆ。折から敷島の道の盛りなる時に、大木の陰たのもしく立ち寄りて

「文政句帖」文政六年正月

俳諧の道に入った頃、その頃流行しだした「敷島の道」和歌の道、つまり国学の思想に強くひかれたといっています、先ほどの「急通記」の記事からもそれがうかがえます。また国学書や古典注釈書など百点に近い文献から一茶みずから抄録・引用して書き残した「俳諧寺抄録」には「儒道、仏道、○神道」という記述があり、そこに「一茶云、儒道、仏道ニゴリテ、神道ノ一人澄ムモ不思議ナリ」という張り紙があり、これは儒道と仏道の「道」は濁音で読むのに神道だけ濁らないのはなぜか、という問いかけですが、それは神道だけが他にすぐれて理にかなっているからだと言いたいのでしょう。俳人一茶はここまでの思いを持っていたのです。では、こうした国学の思想は一茶の俳諧にどのような影響を与えたのでしょうか。

三

自国をどうとらえるかという自国観ともいえるものは幕末の人びとがそうであったように外国と関わることによって、自国と外国を対比することではじめて生まれてきます。幕末にあつて人びとに衝撃を与えたのはペリーの来航でしたが、一茶の時代でのそれはロシアの来航でした。

一七九二（寛政四）年九月、ロシア使節ラクスマンが漂流民であつた大黒屋光太夫らを護送して通商を求めて根室に來航しました。これが日本における最初のウエスタン・インパクト（西方からの衝撃）で、幕府は蝦夷地全域に調査団を派遣しています。この調査団の報告に基づいて幕府は一七九九（寛政十一）年、東蝦夷地の一部を試験的ですが、幕府直轄化します。この情報が江戸に伝わると一茶はさっそく次の句を詠みます。

③ 初雷（はつらじ）やえぞの果てまで御代の鐘
享和二年

④ 是（これ）からは大日本と柳かな
享和二年

この二句からは未開の地であつた蝦夷地の奥地にまで幕府の力が及んだことを無邪気に喜ぶ一茶の心が見えます。

ついで一八〇四（文化元）年九月にはロシア使節レザノフ一行が長崎に來航し幕府に国交・通商を求めます。しかし、幕府はこれを拒否しレザノフ一行に長崎

上陸すら許しませんでした。この時、一茶は江戸にいたのですが、この情報は彼の耳にも入り、さっそく次の句を立て続けに詠みました。いずれもレザノフ來航の年、文化元年十二月の句です。

⑤ 神国の松をいとなめおろしあ舟
⑥ 春風の国にあやかれおろしあ舟
⑦ 門の松おろしあ夷（えびす）の魂消（たまげ）べし
御代（みよ）にあふ

⑧ 梅が香やおろしあを這（は）わす
⑤の句意は「神の国を守る松平、つまり徳川氏にかわつてこの国を管んでいけるというのか、ロシアの舟よ」であり、⑥の句は「いきりたたないで、こんな穏やかな春風の吹く国にあやかつたらどうだろうね、ロシアの舟よ」です。⑦の句は「門松を見たらロシアの野蛮人どもは腰を抜かしてビククリするだろうね」という句意ですが「松」が松平すなわち徳川氏のことだとすれば「門松や」は「日本を守る徳川氏を見れば」という意味に取れないこともありませぬ。⑧の句意は「梅の香のような国日本が、ロシアを屈服させているようで、なんと良い時代に生まれたものだろう」でしょう。

いずれの句も日本を「神国」「春風の国」と持ち上げてロシアを「おろしあ夷」と見下した一茶の日本優越意識、つまり、ロシアがなんぼのもんだ、日本の威光を

恐れて逃げ帰ったじゃないか、さすが神国日本だね、といった意識がはっきりと表現されています。ただし、一茶には幕末の志士たちのような尊皇一辺倒という思考はないようで、神君家康公が作られた神の国というとらえ方も一茶の思考の中にはあるようにもみえます。

ここで蛇足ながら、一言、いっておきたいのは、これまで示した①から⑧の句には「天皇」「神国」「日本」という俳句ではお目にかかることの稀な言葉が使われていることについてです。一茶の全集を見るとこれらの言葉は「頻繁に」といってもよいほど多用されています。そのため「これが俳句か」「これは川柳ではないのか」と思えるものが多くあります。しかし、一茶のこうした句には川柳の持ち味といえる皮肉や茶化しなどの、世の中を超越した高みから見る視点や斜めに構えて見る視座や遊びの精神から詠まれた句、例えば「日本へ手を出すたびに恥をかき」（俳風柳多留四二篇、文化五年の作、蝦夷地への再三にわたるロシア船の侵入を皮肉った句です）といった句はほとんどありません。一茶の句は彼が現実の政治や社会の動向に対して極めて敏感に反応して素直に感情を詠んだものだとしてよいと筆者は考えます。つまり、一茶のこうした俳句らしくない句は一茶の心情をそのままストレートに詠んだ句だと筆者は考えるのです。

一茶はレザノフ来航事件以降、海外の

情報収集に熱を入れます。一八〇六(文化三)年、一茶は大黒屋光太夫といっしよに帰国した磯吉を囲む会に出席して、ロシアの生の情報を聞いています。たがし、出席後に一茶の詠んだ句からみると磯吉の語った話は「ロシアは強大な国であり、弱小の日本では危うい」という話ではなく、聴衆の日本優越論を満足させる話ではなかったと推察できます。

以後、日露関係が緊張の度合いを増していくにつれて一茶の日本びいきは急速に強まっていきます。それは次の句からもうかがわれます。

⑨ 花おのおの大和瑰いさましや

文化四年

⑩ 桜さく大日本ぞ大日本ぞ

文化十年

⑪ 日本は外ヶ浜まで落ち穂かな

文化十五年

⑫ 元日や日本ばかりの花の娑婆

文政四年

⑬ おらんだ渡りの大馬(ラダグダのこと)

日本に年を取るのがらくだかな

文政七年

⑭ 日の本や天長地久虎が雨

文政八年

⑮ の句にある「外ヶ浜」は当時本州最

北端の地にされてきました。そこまで落ち穂があるくらい稲穂が実っているよい国だ、という句です。

⑬の句は文政七年にオランダの国から江戸にラクダがやってきました。このニュースは遠く柏原の一茶の耳にも届いていました。江戸の俳人仲間にあてた書簡に「江戸へ大馬下り候由、ご覧なられ候や」と書き、⑬の句が付けてありました。いささかくだけた句です。

⑭の句で「虎の雨」とは曾我兄弟の仇討ちの話でなくなった曾我十郎祐成を悼んで遊女の虎御前が流した涙が雨になったという話をもとになった言葉です。「優しい慈しみの涙のような雨」という意味です。⑭の句意は日本の国は天地が永遠に変わらぬように常に優しい慈しみの雨のふる土地だ、いい国だね、ということでしょう。いずれの句も自国の素晴らしさを讚美した句です。

自国が素晴らしいとなれば、当然、「君が代」＝徳川の世は、ますます平穩無事でなければなりません。そこで次のような「君が代」の句が多く詠まれていきます。

⑮ 君が代は乞食の家にもものぼり哉

寛政年間

⑯ 君が代や風おさまりて山ねむる

寛政四年

⑰ 君が代や木陰を鹿の親子かな

文化三年

⑱ 君が代や主なき塚も飾り松

文化十五年

⑲ 君が代や厩(うまや)の馬へも

衣配(きぬくばり)

文政三年

⑮の句意は物乞いをするような貧しい家にも鯉のぼりが泳いでいるであり、⑱の句意は家の主人がいなくとも門松が立っているであり、⑲の句意は既にながれている馬にも衣類が配られているであつて、いずれも安寧な世を称賛した句です。また、⑯と⑰の句は静かで平和な「君が代」をめめた句だといえます。

先ほども触れましたが、ここで確認しておきたいのは一茶の言う「君が代」は「天皇の御代」という意味ではないだろうということだ。日本の国家である「君が代」の「君」は「国民」のことだ、いや「天皇」だとかいろいろの議論がありますが、一茶の「君が代」はそんなこととは関わりがなく「今の御治世」を表現する言葉として使っているとみることができるとは近世史家が主張するところであり、筆者もそう考えます。いくつか傍証を示せば、

⑳ 君が代は旅にしあれど

筥(け)の雑煮

寛政五年

という句があります。もちろん、この句

は「万葉集」の有間皇子の「家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」を踏まえた句ですが、㉑の句意は有間皇子の時代に比べ、自分のような身でも今は食うに困らぬ旅ができる、なんとい御治世か、というもの。一茶の正直な生活実感から「今の御治世」の意味で「君が代」を使っているように思えます。つまり、⑮から⑲の句にある「君が代」は「今の御治世」＝「徳川様の御治世」のおかげで天下泰平の世があるという気持ちが一茶にあるとみてよいでしょう。この気持ちのあらわれでしょうか。次の句もあります。

㉑ 国土安穩とのん気にかかし哉

文政八年四月九日

人びとがみな平和に何の不安もなく生きていける今の世は「今の御治世」のおかげだという気持ちがあふれているような句です。

しかし、一茶に①と②の句にあるように「天皇」という言葉を使った句があるので、「君が代」を「天皇の御治世」の意味と「今の御治世」を厳密に区別することなく双方をダブらせて使っていたともみえます。あえていえば一茶には幕末に国学に心酔する人びとの持った日本は天皇が治める神国だ、というかたくなな思想を持つまでは至っていなかったといえそうです。

その証拠というわけでもないですが、一茶は五十八歳を境に亡くなるまでの七年間、「君が代」の語を用いた句をいっさい詠んでいません。健康上の問題は考えにくく一茶自身の心境の変化があったと考えられます。天下泰平の「今の御治世」を賞讃することが口にできないようなことが社会の変化が急速に起こりつつあったのです。時代は青山半蔵の生きた幕末の時代へと突き進んでいたので。

たとえば、一八二四（文政七）年、近くの信州松本藩では赤菘騒動が起き、一茶はこの騒動を聞いて次のような感想を残しています。

「文政句帖」文政八年草稿から

今年秋夷らざれば、世の中さはざはしく騒擾して黒悪党むらがりて、富民の家を焼却いたし、と良からぬ。

敷島の道、物騒なり。定九郎であれば

これきりにして

とあって、今も日本はとても物騒で、こんな時に「仮名手本忠臣蔵」五段目「山崎街道」の場に出てくる放蕩無頼な斧定九郎のような大悪党が現われれば、もうおしまいだね、と一茶は悲観的な社会認識を吐露しています。ただ、そんな思いの一茶でしたが日本にはまだ救いがあるという一抹の希望を持っていたようです。先ほどの書簡と同じ文政七年の句です。

② 末世でも神の国ぞ虎が雨

この句からは、いくらひどい世になっても毎年あの優しい虎御前の流した涙のような慈雨の降り注ぐ神の国日本だ、まだまだ大丈夫、という一茶の声が聞こえてきそうです。

最後に繰り返しになりますが一言。一茶は論理の一貫性を尊ぶ思想家ではありません。俳句という十七文字の短詩形ではあります、鋭い感覚を持った詩人の一人です。生涯二万句を超える句を詠んだ一茶の俳句の中には「雪とけて村いっぱいの子どもかな」大根引き大根で道を教へけり」などの句から受けるイメージとはまったく違う一茶の姿がみられます。いままで紹介してきた句がそれにあります、知識欲旺盛で読書家であり、

世の中の出来事に対して敏感に反応した一茶です。国学や日本優越意識の強い句はそれを素直に表現した句なのでしよう。そうした点でみていくと近世後期の句は興味深い句が多くあるといえます。一茶の俳句を味わうということからは大きく外れそうですが、そこらあたりには筆者は魅力を感じます。

支離滅裂 憑

short & short

y・s

① この国は滅んでいくだろう！

西宮の鳴尾浜の護岸工事現場の警備をしていた時に出会った左官二人のことが忘れられず機会あることに工事監督などに聞いているが、一カ月ほど通ったある現場の監督は意外な事を言った。

80歳の左官である爺さんは貴重だよ。今は左官・タイル屋は貴重でいない。いつも大手が困っている。私が、鳴尾浜で爺さんから聞いた話と同じだ。左官は10年の年季がいるうえ、3Kの仕事だか

ら、若い人がやらない。跡継ぎがない。日当は良いんだがね。

氷点下で六甲おろしが風速10M、鳴尾浜にぶつかる白波が護岸のテトラに砕ける。沖合にいた鳥の群れも白波を避けて武庫川の上流に群れをつくって飛び去る。

監督や他の作業員も躊躇することなく帰り支度をして早々に車で帰ったが、二人の爺さんは、帰ろうとしない。出来るだけの仕事はしたい。普段と変わらぬ準備を始めた。作業員がいる限り、私ら警備員は帰れない。付き合わねばならないから非常に困る。

夕方の5時前になって、爺さんたちはやっと帰り支度を始めた。私にとっても、ながい一日がもうすぐ終わると考えると、いつもはうれしくてたまらないのだが、その日は、なぜ爺さんたちは最後まで仕事を続けたのか？ 大きな疑問が心に残った。

80歳の左官は貴重という監督が言った言葉がまた心を揺さぶる。

「80にもなれば、目もよく見えない。何度も何度もコテで撫でるのはコテで見ているんだよ。表面の出来上がり位をコテの感触で見ているんだよ。」

確かに、日が沈む夕暮れ時に、数えきれないほどコテを撫でる姿は、神がかりの仕業だったのだ。

② この国は滅んでいくだろう！

原稿の締め切りが気になって眠れない。それは嘘で寝苦しくて頭が眠ろうとせず、いろいろな妄想が湧いてくる。そして、どうしても書き留めておきたいと思う事が出てきた。

権力者が考える戦争論理とわれら庶民の戦争論理は全く違うのだ、ということに、これまで気が付かなかった。なんとこの怠慢、バカな単純な頭だったのか。テレビではゲームのようにウクライナの戦争を毎日やっている。これを見ている自分が如何にバカか気が付いた。

私は、しがたない貧しい警備員だ。これから先の事を考えても、それほど良い事がありそうでもない。そんな自分にとって戦争とはなんなのだ。戦争の悲惨さを嫌というほど頭に叩き込まれ、敵を殺すか殺されるか妄想ともいえる論理で戦争の恐怖感をおおって、戦争反対、戦争賛成のバカバカしい事を続けている。

しかし、私にとっては、戦争イコール殺されるのではない。いや、もっと生活が良くなる可能性もある。最下層の労働者は戦争によって殺されたり虐待されたりはしないかもしれない。だが権力者になっても同じような生活しかなかったのだから、安心していい。ただ、裕福な権力者たちは、そうはいかない。ド心底の生活か死刑になるかもしれない。

ここで大事なことは、一般庶民と裕福

な権力者たちとでは、戦争の意味が全く違うという事である。しかし、権力者は詭弁でもって庶民を戦争に駆り立て財産はおろか命までも差し出して戦わせようとす。これはペテンでしかない。このことに気づけば戦争なんかバカバカしくてやっつけられない。

隠された歴史(58)

満田 正賢

今回は、「隠された歴史(8)」などで何回も取り上げている、宣化天皇の「那津官家設置の詔」の解釈について、改めて深く掘り下げたいと思います。その理由は、筑紫天皇(後期九州王朝)に関する私の仮説が、近畿王朝一元論に立つ研究者はもとより、私の所属する古田史学の会の中でも大半の会員にまだ認められていないからです。古田史学の会は、九州に倭国の都があったとする古田武彦氏の「九州王朝論」の立場に立っていますが、一方で古田氏は「多元的古代史観」という歴史観も提唱しています。しかし現在の会員の多くは「九州王朝は一元的に継続している。磐井の乱は九州王朝の

内乱だった。」という、九州王朝一元論とも呼ぶべき考えに囚われていると私は感じています。

さて、古田史学の会の服部静尚氏が、最近「FUGEN」という会誌に投稿した「武天皇は九州王朝系なのか近畿天皇系なのか」という論文の中に、宣化の詔に関する古田史学の代表的な考察がありまので、ご紹介します。服部氏の考察の要旨は、服部氏自身が次のようにまとめられています。

①「朕が阿蘇の君を遣わして茨田の屯倉の穀を運ばせると、朕が命ずる」という文章は変である。命じたのは九州王朝の天皇であって、阿蘇の君が近畿天皇の宣化天皇に茨田屯倉の穀を運ばせたという記事の主語を入れ替えたものと考えられる。

②阿蘇の君はその名より在九州の人物と考えられる。一方近畿天皇と茨田屯倉には濃厚な関係性が見られる。つまり、元は阿蘇の君が朕(宣化天皇)を遣わせて、河内国茨田郡屯倉の穀を運ばせた記事であった可能性が高い。

③この時期の九州王朝は各地に派遣した臣下を介して、地方の豪族らにその地に屯倉を造らせ、時に筑紫へ貢納させるといった間接支配をしていたものとみられる。

この服部氏の論考に対する反論として私の考察を述べます。まず、服部氏は「宣化の詔」の一箇所を取上げています

が、「宣化の詔」を理解する為には宣化紀の記述全体の中で宣化の詔を捉える必要があります。

宣化紀によれば、宣化天皇はまず、大伴金村を大連に、物部鹿火を大連に、蘇我稻目を大臣に、阿倍大麻呂を大夫に据えたと記述しています。そして、宣化の詔では、蘇我稻目、物部鹿火、阿倍臣に穀を那津官家に運ばせるよう指示しています。ここでは臣下の筆頭に記された大伴金村が出てきません。その理由は、大伴金村には直接、息子である大伴磐と大伴狭手彦を遣して任那を助けるよう指示しているからです。大伴磐は筑紫に留まって、その国政を執行し、三韓に備えたと記述しています。すなわち大伴金村には那津官家に穀を運ぶ任務を免除する代わりに、二人の息子を(*おそろくその部下と共に)指揮官として派遣させているのです。

ここで、主題である「宣化の詔」の原文と訳文をご紹介します。

*「日本書紀」原文

夏五月辛丑朔、詔曰「食者天下之本也黄金萬貫、不可療飢、白玉千箱、何能救冷。夫筑紫國者、遐邇之所朝屆、去來所關門、是以、海表之國、候海水以來賓、望天雲而奉貢。自胎中之帝泊于朕身、收藏穀稼、蓄積儲糧、遙設凶年、厚饗良客。安國之方、更無過此。故、(a)朕遣阿蘇

仍君未詳也、加運河内國茨田郡屯倉之穀。(b)蘇我大臣稻目宿禰、宜遣尾張連、運尾張國屯倉之穀。物部大連鹿鹿火、宜遣新家連、運新家屯倉之穀。阿倍臣、宜遣伊賀臣、運伊賀國屯倉之穀。修造官家那津之口。又其筑紫肥豐三國屯倉、散在懸隔、運輸遙阻。儻如須要、難以備卒。亦宜課諸郡分移聚建那津之口、以備非常、永爲民命。早下郡縣、令知朕心。

*日本古典文学大系(岩波書店)版「日本書紀」訳文

夏五月の辛丑の朔(ついでたちのひ)に、詔して曰く「食は天下の本なり。黄金萬貫(よろずはかりあり)とも、飢を療(いや)すべからず。白玉千箱ありとも、何ぞ能く冷を救うはむ。夫れ筑紫國は、遐(とお)く邇(ちか)く朝(まう)で届(いた)る所、去來(ゆきき)の關門(せきと)にする所なり。是を以て、

海表(わたのほか)の國は、海水(しお)を候(さもら)ひて來賓(まう)き、天雲を望(おせ)りて奉貢(みつきたてまつ)る。胎中之帝(ほむだのすめらみこと)より朕が身に泊(いた)るまでは、穀稼(もみいね)を收藏(おさ)めて、儲粮(まうけのかて)を蓄(たく)へ積みたり、遙に凶年に設け、厚く良客を饗(あへ)す。國を安みする方(さま)、更に此に過ぐるは無し。故、(a)朕、阿蘇仍之末(いま)だ詳(つまびらか)ならず。を

遣はして、加(また)運河内國の茨田郡屯倉の穀(もみ)を運ばしむ。(b)蘇我大臣稻目宿禰は、尾張連を遣はして、運尾張國の屯倉の穀を運ばしむべき。物部大連鹿鹿火は、新家連を遣はして、新家屯倉の穀を運ばしむべき。阿倍臣は、伊賀臣を遣はして、伊賀國屯倉の穀を運ばしむべし。修造官家(みやけ)を那津の口(ほとり)に修(つく)り造(た)てよ。又其の筑紫・肥・豐の三つの國の屯倉、散在り。運び輪(いた)さむこと遙に阻(へ)だたれり。儻如(も)し須要(もち)るむとせば、以て率(にはか)に備(そな)へむこと難(かた)かるべし。亦諸郡(もろものこほり)に課せて分(く)ばり移して、那津の口に聚(あつ)め建てて、非常に備へて、永ら民の命とすべし。早く郡縣(こほりこほり)に下して、朕が心を知らしめよ」とのたまふ。

原文の(a)の文章には「加」の文字があり、(b)の文章には「加」の文字がありません。そこには明確な違いがあります。岩波版「日本書紀」では「加」を「また」と訓みながら「阿蘇之君(未だ詳らかならず)を遣わして、また、茨田の穀を運ばしむ」と訓んでいます。すなわち文章の解釈としては、A for B、「阿蘇之君を(茨田屯倉に)遣わして茨田の穀を(那津官家に)運ばせる」という解釈です。服部氏の考察は、この通説の書き下

し文によるものです。今回、この「加」の文字の使用例を日本書紀全体に当たってみました。その結果、宣化紀以外では使用例がありませんでした。ところが、「加」の文字は宣化紀においても一箇所、大伴磐と狭手彦の派遣記事の中でも使われているのを発見しました。

*「日本書紀原文

天皇、以新羅寇於任那、詔大伴金村大連、遣其子磐與狭手彦、以助任那。是時、

磐、留筑紫執其國政、以備三韓。狭手彦、往鎮任那、加救百濟。

*日本古典文学大系(岩波書店)版「日本書紀」訳文

天皇、新羅の任那に寇(あだな)ふを以て、大伴金村大連に詔して、其の子の

磐(いわ)と狭手彦(さでひこ)とを遣

して、任那を助けしむ。是の時に、磐、

筑紫に留まりて、其の國の政(まつりごと)を執(と)りて、三韓に備ふ。狭手

彦、往きて任那を鎮め、加(また)百濟

を救ふ。

この箇所は岩波版日本書紀の書き下し

文は「狭手彦、往きて任那を鎮め、また、百濟を救う」となっています。「加」については「また」という同じ訓みをしていますが、この場合の文書の内容は、A and Bであり、極めて自然な訓みです。

岩波版日本書紀は、なぜ那津官家設置の詔の書き下し文をA and Bにしなかったのでしょうか。すなわち、「阿蘇の君を遣わし、また、茨田の穀を運ぶ」としなかったのでしょうか。それは(a)の内容がそれに続く(b)の内容と同じ意味をもつと判断したからではないかと思われまます。しかし、先にある(a)の文章にわざわざ「加」の文字を挟んでいるにも拘わらず、その後の「加」の文字が挟まれていない文章に引きずられるのはおかしいことです。

服部氏は宣化の詔の文章を「朕が阿蘇の君を遣わして茨田の屯倉の穀を運ばせると、朕が命ずる」と訓んでいます。そう訓めば確かにこの文章は変です。しかしそれが文章としておかしいことは、当然日本書紀の編者にもわかることです。日本書紀の編者が文章を粉飾したために所々で全体または前後の文章とのつじつまが合わなくなっている傾向は見られますが、粉飾した文章そのものが変である、ということとは違う次元の問題です。日本書紀の編者はこの文章がおかしくないと考えてこの文章を作ったと思われまます。すなわち砕けた言い方をすれば、朕は「お

これはこうするから、おまえ達は「こうしろ」と呼びかけたのであろうと私は解釈します。

私は宣化の詔を訓むにおいて「加」が挟まれた文章(a)を自然に解釈します。私の書き下し文はつぎのようなものです。

「朕は、阿蘇之君を(那津官家に)遣わして、また、茨田の穀を(那津官家に)運ぶ。蘇我大臣稻目宿禰は宜しく尾張連を遣わして、尾張國屯倉の穀を運べ。物部大連鹿鹿火は宜しく新家連を遣わして、新家屯倉の穀を運べ。阿倍臣は宜しく伊賀臣を遣わして、伊賀國屯倉の穀を運べ。」

人を派遣する、また、穀を運ばせる目的の地は那津官家です。服部氏は阿蘇之君を九州王朝が派遣した人物であり、主語が入れ替わっていると解釈しますが、主語を入れ換えなくても九州王朝(磐井王朝)の人物を宣化が召し抱えていた、そしてその人物を那津官家に派遣したという解釈は可能です。私は、阿蘇之君は宣化天皇が直接召し抱えていた、磐井の乱で捕らえた磐井配下の人物であろうと推測します。尾張連は蘇我稻目の配下、新家連は物部鹿鹿火の配下、伊賀臣は阿倍臣の配下であると考えれば、全体の解釈は成り立つと考えます。なお、文章(b)は「AをBに派遣してBの穀物を運べ」という文章ではなく、「加」を省略した文章、すなわち「Aを那津官家に派遣し、

またBの穀を那津官家に運べ」という文章である可能性もあると考えます。

服部氏の論考に立ち返ると、服部氏の考察の中で、宣化の詔の解釈がおかしいという点と、阿蘇の君はその名より在九州の人物と考えられるという点は正鵠を得ていると思います。しかし、服部氏の考察はこの二点のみを根拠にして史実を探ろうとする試みであり、宣化紀に記されている史実の全体像を説明出来るものとはなっていないと考えます。

宣化の詔を前述のように解釈し、大伴磐、狭手彦の派遣記事を加えて考察すると、宣化天皇が近畿王朝の臣下と穀を那津官家に送り込み、現地の人々の懐柔の為に磐井の元臣下を送り込み、指揮官として大伴磐を派遣した、という史実が見えて来ます。これらの目的は那津官家に遷都するための下準備、地ならしであったのではないのでしょうか。

通説の研究者は那津官家のもつ意味を理解出来ませんでした。なぜならば、那津官家関連記事が欽明紀以降いっさい現れないからです。しかし、「隠された歴史(28)」でご紹介しましたが、二〇一八年に大阪歴史博物館で開催された大阪歴史博物館主宰のシンポジウム「古墳時代における都市化の実証的比較研究―大坂上町台地・博多湾岸・奈良盆地―」において、久住猛雄氏が「古墳後期末から飛鳥時代中頃にかけて、比恵・那珂が『第二の都市化』の時代を迎えた」という発

表を、菅波正人氏が「那津官家から筑紫館―都市化の第二波―」(菅波正人氏)、という発表を行なっています。これらの

考古学的調査結果によれば、那津官家(六世紀頃の比恵・那珂遺跡)JR博多駅の南に広がる大規模遺跡は当時大和より都市化が進んだ地域であり、けして無視してよい存在ではありません。

「宣化の詔によって築造された那津官家に、後に宣化天皇の子が遷都して、筑紫天皇家(後期九州王朝)を建てた。そして日本書紀を編纂した、後の近畿王朝はその史実を秘匿した」とする私の仮説以外に、日本書紀の宣化紀の記述を包括的に解釈する仮説はないと考えます。

「道をゆく」四二一

成瀬和之

「女芭蕉の心意気

桑原久子の旅日記から」(二〇)鎌倉

四月二一日 久子さんらは鎌倉に入ります。

『鎌倉』(作詞：芳賀矢一、作曲：不詳)という唱歌があります。

「七里が浜の磯づたい 稲村ヶ崎名將の 剣投ぜし古戦場

極楽寺坂超え行けば 長谷観音の堂近く 露座の大仏おわします

由比の浜辺を右に見て 雪の下村過ぎゆけば 八幡宮の御社

上るや石のきざはしの 左に高き大銀杏 問わばや遠き世々の跡

若宮堂の舞の袖 しずのおだまきくりかえし 返せし人をしのびつつ…

これは、一九一四年(大正三年)刊行の「尋常小学唱歌」第六学年用に掲載された文部省唱歌です。この歌は鎌倉の觀光名所や歴史上の人物が詰め込まれた「歴史観光ガイドブック」のような「当地ソング」です。

歌詞だけではわかりにくいところを中心に解説していきます。

「稲村ヶ崎と新田義貞」

稲村ヶ崎の剣(つるぎ)投ぜし古戦場とは、鎌倉幕府を事実上滅亡に追い込んだ武将・新田義貞(にったよしざと)にまつわる伝説の場所です。鎌倉時代末期の一三三三年五月に挙兵した新田義貞は、稲村ヶ崎の海岸を渡ろうとしたところ、当時は崖で道が狭く、軍勢が稲村ヶ崎を超えられませんでした。そこで、義貞が潮の引くのを念じて剣を投じると、見るまに潮が引いて干潟となり、鎌倉へ進軍できたという伝説が『太平記』に記されているのです。この時、義貞の軍は鎌倉を陥落させます。北条高時は幕府の館に火を放ち、高時以下一門その他、八七〇余人が自殺しています。この一三三三年、頼朝の開府以来一五〇年続いた鎌倉幕府が滅びたのです。

「長谷観音」

鎌倉長谷寺の本尊、十一面観音菩薩像は、「長谷観音」の名で親しまれてきました。高さは九・一八メートルで、大和長谷寺の約一〇メートルに迫ります。なお、観音山のすそのから中腹にかけて広がる境内は、四季を通じて花木が鮮やかな彩を添え、また、遠く相模湾を見渡すことのできる眺望は、鎌倉随一とも賞されます。

「露座の大仏」

露座(ろざ)の大仏とは、雨ざらしの大

仏、つまり鎌倉大仏のことです。

鎌倉大仏は高さ一三メートル強で、中が空洞になっており、入場料二〇円で内部に入ることもできます。

鎌倉のシンボルの一つ、超有名な大仏でありながら、正確な建立年や原型製作者が不詳であるのを始めとして、多くの謎に包まれています。奈良大物が勅命によつて造営されたので明確な資料が多く残っているのですが、鎌倉大仏には明確な資料がありません。

鎌倉大仏は、比較的頭が身体に比べて大きく、少し前に傾いています。なぜ「猫背」なのでしょう？かつて覆い堂があった、大仏さんがそこにいらなかったなどという説もあります。

かつて大地震で今よりも傾きが大きくなった時には、僧たちが「大仏様が泣いている」と大騒ぎをした逸話があるくらいです。現在は創建時の傾きが保たれています。頭を支えるための昭和の補強の跡が首の付け根あたりに見られます。これ以上でも、これ以下でもない「絶妙な傾き」なのです。

実は、鎌倉大仏の造られた鎌倉時代の仏像の流行スタイルであったようです。当時「頭でっかちの俯いた猫背」という体型の流行があったのです。大仏と言え

ば目が細く閉じているように思われがちですが、鎌倉大仏にはしっかりと瞳が彫られています。猫背になっているのは、

参拝者と顔を合わせるためなのです。訪れた参拝者と顔を合わせ、あたかもその人の願いを聞き入れてくれるようです。

なぜ、鎌倉大仏は造られたのでしょうか？鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』には、奈良大仏を見た源頼朝が「鎌倉にも大仏が欲しい」と切望し、僧浄光が、民衆から資金を集めて建立されたと記載されています。また、『太平記』などによると、当初は大仏殿が建てられていたのですが、台風などで倒れてしまい、二度三度再建されながらも最後は再建を断念し、これ以降、露座の大仏として親しまれたことの記述があります。

また、『吾妻鏡』や『東関紀行』を総合すると、一二四三年に高さ二四メートルという現在の倍以上の木造の大仏が開眼供養されましたが、わずか一〇年後の一二五二年から二代目の大仏が金銅で造り始められました。

奈良大仏には金メッキが施されていますが、鎌倉大仏には金メッキより費用のかさむ金箔が貼られていました。これは、鎌倉大仏の素材が、純度の低い鉛の成分の多い銅を使用したことにより、鑄造の際、継ぎ目が目立ち醜かったため、あえて高価な金箔を使用したのです。両頬の一部分に、その金箔の名残を見ることができます。

このように断片的な資料はあるのですが、建立年などの基本的事項を裏付ける正確な資料がないため、歴史を教える教

科書には記載しにくいのです。「学校の勉強」には不向きかも知れませんが、それらの資料を紡いで、謎が多い鎌倉大仏の素顔や歴史に迫ることは「歴史ロマンの醍醐味」を感じさせます。

作者不詳ながらも、鎌倉時代らしい力強さと優美さを融合した美しい鎌倉大仏は、建立当時のままの姿が保たれているのが評価されて、国宝となりました。

鎌倉大仏の後ろの方右側に与謝野晶子の歌碑があります。

「かまくらや みほとけなれど釈迦牟尼は 美男におわす夏木立かな」です。

鎌倉大仏は釈迦如来ではなく、阿弥陀如来です。与謝野晶子は勘違いして詠んだのです。

なお、奈良大仏も、釈迦牟尼のように、この世に人間として生まれて仏となった如来ではなく、盧舎那仏です。釈迦とか阿弥陀など数ある仏陀を統一し、真理そのものをあらわしたとされる仏陀が盧舎那仏です。

いずれにしても、与謝野晶子のこの歌碑は、中学校や高校の国語資料集などにも注釈なしで載っており、鎌倉大仏を有名にしたこの歌の功績は大きいのです。

「鶴岡八幡宮と雪ノ下」

雪ノ下村とは、かつて存在した地名「雪ノ下村」。現在の「雪ノ下」、吾妻鑑によると、鶴岡八幡宮を訪れた源頼朝が、佐々木盛綱らに山辺の雪を貯蔵させたことが

由来だとされます。

「八幡宮」とは、鎌倉市雪ノ下にある鶴岡（つるがおか）八幡宮のことです。

桑原久子さんは次のように詠んでいます。

「いにしへにこがねの札をとりか
けて はなちしつるが岡はよろず
よ」

久子

八幡信仰は九州宇佐氏の氏神が根源といわれ、応神天皇を祭神としてからは皇室の、清和源氏の氏神となつてからは武家の信仰を集めました。

応神天皇は四世紀末から五世紀初頭に実在していたことが有力視され、『宋書倭国伝』に登場する「倭の五王」のうち、最初の倭主である「讚」とする説もあります。鉄製の農具や武器が普及した中期古墳時代で、大王が武断的側面を持つていた時代相を投影して、八幡宮の祭神とされたのでしょうか。

七五二年の大仏開眼とともに奈良東大寺の鎮守、手向山八幡宮となつて中央に進出します。八六〇年には、石清水八幡宮が京都に勧請（かんじょう）され、祭神を応神天皇として伊勢神宮に次ぐ宗廟となりました。石清水八幡宮は清和源氏の信仰を集め、広大な所領を得ました。

一〇五一年〜一〇六二年にあった前九年合戦の後、源頼義が清和源氏の氏神石

清水八幡宮を鎌倉に勧請して鶴岡八幡宮ができました。武神として全国に広まり、神仏習合によつて生まれた僧形八幡像に菩薩号が贈られ、「八幡大菩薩」と称されました。「菩薩」ですから神仏習合です。

鎌倉初代将軍源頼朝が現在地に移し、以来、源氏の守護神となりました。

鶴岡八幡宮の祭神に「神功皇后」が加わっているのを発見しました。

「神功皇后」というのは、神のお告げで朝鮮を攻め、新羅を降伏させ、百済や高句麗を服従させたという「三韓征伐」の立役者として、『古事記』や『日本書記』に出てくる伝説上の人物です。明治になつて日本政府が発行した紙幣の登場人物第一号が「神功皇后」でした。朝鮮は「征伐」の対象であるかのように、また大昔から日本が朝鮮を支配していたかのように、政府の政策によつてそうした意識を持つように意識的に仕向けられてきたのです。「神功皇后」は、大阪の住吉大社の祭神にもなっています。初詣の参詣者数が全国有数のこのような神社をはじめとする全国の多くの神社の祭神に

いまだに「神功皇后」が登場していることは、それに加担するものではないでしょうか？

「鶴岡八幡宮の大銀杏、若宮社」

一二一九年一月二七日夜、鶴岡八幡宮の石段（石のきざはし）を下つてきた三代将軍実朝は、大銀杏のそばで暗殺され

ました。残念ながら、二〇一〇年三月一〇日の未明、雪と強風のため、樹齡一〇〇〇年を超えていた大銀杏は、根元から倒伏してしまいました。今、新しい若木が生育中です。

久子さんら女人の旅人の心を惹くのは鶴岡八幡宮の若宮社です。

義経の愛人、静御前が頼朝の前で、白拍子姿で謡つて舞つた場所です。

並みいる鎌倉武士の前で、「紅の袴踏みしだき、丈なす黒髪に烏帽子をかぶつて扇かざして」謡いつつ、舞つたのです。宅子さんは口ずさみます。

「吉野山みねの白雪ふみ分けて
入にし人のあとぞ恋しき
しづやしづしづのをだまきくり返し
むかしを今になすよしもがな」

「しずのおだまきと静御前」

「しずのおだまき」とは、源義経の愛人・静御前（しずかごぜん）が捕らわれて鎌倉に送られ、鶴岡八幡宮の社前で頼朝に命じられ白拍子（しらびょうし）の舞を舞つた時の歌の一部です。

「しづやしづ しづのおだまき 繰り
かへし 昔を今に なすよおしもが
な」

（おだまきから糸を繰り出すように（時間を巻き戻し）、義経様が「静よ静よ」と繰り返す私の名を呼んで

くださつたあの昔に戻れたらなあ。）
※「しず」（倭文）は織物の名前。「芋環（おだまき）」は、糸を巻いて玉状にした環状にしたもの。布を織るのに使う中間材料です。

頼朝の前で、敵になつて追われている夫の義経を思う歌を・・・追捕する罪人を、わが前で恋慕するとは、頼朝の怒りもすさまじかつたことでしょう。

そこを頼朝夫人の政子を取りなします。「私も貴方が敵に追われて行方知れないとき、どんなに辛くて切なかつたことでしょう。女は相見たがいでございませうから、静の気持ちは私にはよくわかります。どうぞお許しくださいませ。」

そのように取りなされ、頼朝も機嫌をなおして、静に衣装を与えたといひます。

このように、小学唱歌「鎌倉」を解説すると、しつかり「鎌倉歴史観光ガイド」になります。しかも、今日流行の「ご当地ソング」のはしりだとも言えます。

久子さんたちは、四月二二日の昼頃に江の島に着きます。江の島へは当時、汐の引いた時に徒歩（かち）で渡りました。満潮時には舟で渡りますが、久子さんらは徒歩で渡れたのです。

「汐ひればなみさへなつの夕まぐれ入江のしまにかちわたりする」

久子

（汐が引いたら、波も夏の夕暮れで
明るので、江の島に徒歩で渡りま
すよ）

荷物を茶屋において江の島を一周する
と一里ばかり（四キロメートル）です。

山に登ると、弁財天の社があります。三
社の弁天で三か所を回りますが、「何れも
同じ造りざまなり」と久子さんは言いま
す。そのあと磯辺に出て、岩穴の中を炉
火で辿りゆくと、いろいろの神仏がまつ
られていました。もとの道に戻って、名
高い貝の作りものなどを見えています。

【コラム】 「天城越え」

隠しきれない 移り香が
いつしかあなたに 浸みついた
誰かに盗られる くらいなら
あなたを殺して いいですか
寝乱れて 隠れ宿
九十九折り 浄蓮の滝
舞い上がり 揺れ落ちる 肩のむこ
うに
あなた・・・ 山が燃える
何があっても もういいの
くらくら燃える 火をくぐり
あなたの超えたい 天城越え

この、「あなたを殺していいですか」と
情念に燃える女性のモデルは鎌倉幕府を
開いた源頼朝の正室、北条政子だったと

作詞の吉岡治が語っています。

政子は北条時政の長女として一一五七
年に生まれました。平家の流れをくむ
父・時政は伊豆の在庁官人（地方官僚）
をつとめ、平治の乱で敗れてこの地に流
されていた頼朝を監視する役回りでもあ
りました。その頼朝と娘の政子が、まさ
かの恋に落ちてしまうのです。

『源平盛衰記』では、時政は平家にこ
のことが発覚することを恐れ、伊豆目代
（在庁官人を指揮する立場の役人）の山
木兼隆に嫁がせる計を案じるといふ話が
書かれています。しかし、政子は山木と
の婚礼の最中、屋敷を抜け出し自分が愛
する頼朝のもとに走るのです。

「こうときめたらまつしぐら」政子の情
念がほとぼしる逸話です。

「戻れなくても もういいの
くらくら燃える 火をくぐり・・・」
その一途さに父も納得せざるを得ませ
んでした。やがて頼朝が平家の軍勢を破
って「鎌倉殿」（鎌倉幕府の頂点の意味）
となり、正室の政子は「御台所（みだいど
ころ）」と呼ばれ敬われるようになります。

一一八二年、政子は二人目の子ども（の
ちの二代目将軍・頼家）を授かります。
その政子の妊娠中に頼朝は亀の前とい
う若い女性を寵愛するのです。

出産後に時政の妾（めかけ）でのちに
後妻となる牧の方から、この話を聞くと
政子は怒り狂います。

「誰かに盗られる くらいなら

あなたを殺して いいですか・・・

政子はすぐ牧の方の父・牧宗親に、頼
朝が亀の前を囲っていた伏見広綱の屋敷
を破壊させます。亀の前は命からがら葉
山町へ逃げ隠れましたが、広綱は流罪に
処せられます。

しかし、この時代は一夫多妻制で、貴
族や武家は、本妻だけではなく多数の妾
に子を産ませ、一族の安泰を図るのが普
通でした。婚姻制度が今日とは違うこと
をふまえておく必要があります。戦乱の
時代、合戦によって武士の夫が亡くなる
ことはよくあることでした。夫が亡くな
ったら、妻が財産を管理し、家を守らな
ければならないのは女性でした。地頭に
女性が任命されることもあったのです。

江戸時代より鎌倉時代は女性が力を持っ
ている社会だったのです。「後妻打ち」も
正室に与えられた正当な行為とみなされ
ていたのです。
それにしても、なぜ、政子はここまで執
拗に怒り狂ったのでしょうか？

伊豆の小さな豪族に過ぎない北条氏と、
高貴な源氏との家柄の格差が背景にあつ
たのかもしれない。「御台所」といえど
もその地位は、決して安定したものでは
なかったのです。それゆえに政子は、情
念の炎をめらめらと燃やして強い女性を
演じきったのではないのでしょうか？

江戸時代の『武者鑑』には北条政子を
「嫉妬深く、根性悪き」女性と書かれて

います。淀殿、日野富子とともに「日本
三大悪女」に政子を数えあげられていま
した。北条政子は本当に「強くて怖い女
性」なのでしょうが？

儒教的倫理観に立つ江戸時代と違って、
鎌倉時代は女性の地位は高かったと言え
ます。そのような条件の下で、政子は能
力を蓄え、有能な女性となっていたのだ
です。

政子の有能さを最も示したのは、一二
二年の「承久の乱」の時です。三代将
軍実朝が暗殺されると、これをチャンス
と見て、後鳥羽上皇は、「北条義時を討て」
という命令を出します。動揺する御家人
たちを前に、姉の北条政子は演説をしま
す。

① 「朝廷側につくのか 鎌倉側
につくのか ありのままにお
つしやいなさい。あなたたちお
聞きなさい 私ほど若い頃から
悲しい思いをしてきた者はいま
せん。大姫（長女）を頼朝殿（夫）
を、頼家殿（長男）を、実朝殿
（次男）を亡くし、四度悲しみ
にくれました。今度義時（弟）
が討たれば、五度目の悲しみ
を味わうのです。」

① 「あなたたちは 都に召され
て 内裏の警備を務め 三年
間故郷を思い 妻や子供を恋
しく思っていました。そんなお
努めが軽くなるように將軍が

尽くしてきたのです。」

② 「あなたたちが朝廷側につくのは 將軍の墓を馬の蹄で蹴らせるようなものです。」

③ 「あなたたち 私は若い頃からきつい調子で物を言う者です。 朝廷側につくのか 鎌倉側につくのか ありのままにおっしゃいなさい あなたたち」

この演説は明治大学文学部教授、井上優氏によると、シェークスピアの『ジュリアス・シーザー』の、シーザーがブルータスらによって殺された後のアントニウスの演説に似ているのです。「ブルータスお前もか」のセリフで有名な、シーザーが暗殺された時の演説です。

① 「友よ ローマ人よ 同胞諸君

耳を貸してくれ！ 私が来たのはシーザーを葬るためで、褒めたたえるためではない。ブルータスはシーザーが野心を抱いたという そうなら嘆かわしい罪だ」

② 「シーザーは多くの捕虜をローマに連れ帰り、その身代金はすべて国庫に納め公金とした。そのシーザーが野心を抱いているように見えたか？」

③ 「このマントに見覚えがあるなブルータスが刺したのはここだ。

シーザーは血の潮(うしお)に倒れこんだ」

④ 「私はブルータスのように雄弁家ではない。シーザーは所有していた庭園などを諸君に残している。これがシーザーだ。これほどの人物が二人といるか？」

二つの演説には共通点があります。

① 本題は後回し

② 情に訴える

③ 具体的に生々しい表現

④ ラストに本題

人の心を動かすポイントはここにはありません。結論を最初に言うのと、押し付けられた気持ちになります。そうではなく、結論をラストに持つてきて、印象が後に深く刻まれるメッセージの発し方になっています。「あなたたちちゃんと考えて決断を下してください」「私の言うとおりに従うのがいいでしょ」と、へりくだり、相手に決定をゆだねているのです。名演説の基本は古今東西を問わず共通しているのですね。ただし、最初に話を聞いてもらえる信頼関係が前提条件としてなければ始まりませんが。

承久の乱に勝って、北条氏を中心とする執権政治が始まります。北条義時も一二二四年に先に亡くなります。次の執権は泰時(政子の甥)です。残された政子

が亡くなったのはその翌年の一二二五年です。

死ぬ直前の政子の言葉は発見されました。「もし政子に事あらば鎮守天下をもつて報恩なすべき」

この言葉は、泰時に宛てた言葉でした。泰時は「政子が死んだら出家して身を引きたい」と考えていました。政子は、泰時に「頼朝が築いた幕府が続くよう、守りなさい。」と諭しているのです。政子の思いを受け止め、出家を辞め、泰時は北条氏中心の合議体制をとり、鎌倉幕府は安定期を迎えました。

それにしても、北条政子の人生は、長女、夫、長男、次男、そして弟に先立たれ、壮絶な人生でした。「力と力の対決」をやめて、「きちつと法律を作ろう」ということになりました。北条泰時は「御成敗式目」を作ります。頼朝以来の先例や道理を五一か条にまとめ、幕府としての裁判に基準を決めたのです。「聖徳太子」の「一七条憲法」のちょうど三倍が五一條になるのです。「御成敗式目」は武士の時代の法律の基本となり、江戸時代の「武家諸法度」まで四〇〇年以上受け継がれることになりました。北条政子は、貴族の時代から武士の時代への大転換の時代を生き抜いた偉大な女性ではなかったでしょうか？

武士の歴史について深い豊かな教養をもっていた松尾芭蕉は、「明月のいずるや

五十一ヶ条」の句を作り、式目の出現を冷涼の明月に例えています。

そして、桑原久子さんが亡くなったのは、ペリー来航の年です。開国を迫られ、武士の時代、「士農工商」の時代の終わりを告げる大転換の時代の始まりだったのです。

俳句

影山 武司

明易の目覚めの床の夢うつつ
蟬時雨本社末社を包みを取り
油蟬とぎれて木の間静まれり
炎昼や耳鳴りの音のみ激し
空蟬の眼に遠き光かな
金魚玉路地の奥でのけんけんば
父のこと母のことなど線香花火
でむしの角を打ち振り雨を恋ひ
間延びして時打つ時計あつぱつぱ
雨告ぐる風の立ちたる夏野かな

▼猛暑が続いている。摂氏四〇度という気温を聞いてもさほど驚かなくなつた。学生のころはエアコンなどというものはなく友人が扇風機を持つたと聞いただけでうらやましく思ったものだ。今は気温が高くなる昼下がりには熱中症が怖くてとても外に出られない。お盆が過ぎれば少しは涼しくなるのではないか、そんな期待をもつてクーラーの効く部屋に毎日こもっている。▼京都でお盆の行事といえは八月一六日の五山の送り火である。觀光化しているとはいえ、お盆の始まりに帰ってきた先祖の精霊をお盆の終わりに見送るため、あの世への暗い道を明るく照らして無事に帰れるようにと願つて始められた行事だ。チロチロと揺れる大文字の火の光をいささか厳肅な気持ちにもなる。五山の火を介して死者の霊と語り合っているような気分になるから不思議だ。▼社会学者の大澤真幸さんによれば『我々の死者』を持たない者は『未来の他者』を持つことはできない「そ」うだ。大澤さんのいう「我々の死者」とは「その人たちのおかげで我々の現在がある」「その人たちの願いを引き受けずにはいられない」と思ふような死者であるという。大澤さんの話は司馬遼太郎

の小説に関わつて語られた中でのもので、日露戦争終結から太平洋戦争の終結までの間をテーマにした小説を司馬さんが書かなかつたのは、この時期には「我々の死者」の存在を司馬さんがついに確認できなかったからだという。二〇世紀の前半に「我々の死者」をもてないということは現在の我々が「未来の他者」への感受性や想像力を持ち得ないことにつながると大澤さんはいふ。思えば場当たり的な政策に終始し解決すべき諸問題を先送りしている我々が政府とそれを選挙でみすみす許している自分らの日常が見えてきて気恥ずかしくなる。▼「その人たちのおかげで我々の現在がある」「その人たちの願いを引き受けずにはいられない」人々とは偉人とは限るまい。むしろ我々庶民にとつてはすでに今は亡くなり自分にとつてかけがえのない人たちがこそそうなのではないのか。日々の忙しさに忘れかけてはいるが「我々の死者」は我々のそばにいてのではないか。▼沖繩戦終結の地である摩文仁の丘には平和祈念公園があり、そこには沖繩戦で亡くなられたすべての人々の氏名を刻んだ「平和の礎（いしじ）」がある。二〇数万名もの人の名前が石に刻まれずらりと並んでいる。死者は何も語らぬ。しかし、この圧倒的な死者名の数は見る者を圧倒する。死者の声が聞こえた

と思う瞬間である。▼八月一五日は太平洋戦争終結の日である。この戦争で小生の親族の中で一人はインパールで、もう一人はレイテで戦死した。いまだに遺骨すらも帰ってきてはいない。八月一六日の五山の送り火を見ながら今年も少しく死者の声に耳を傾けようと思う。「未来の他者」と語り合うためにも。



蓮の花



ルリタマアザミ



白桔梗

川柳を読む ③

秀句の条件などの論を読みなるほどと思うこともあるが、それは専門の評者にまかせる。ただ私にとつては、誰かの句を読み、その向こうに何かを思うことができる句が、私にとつてのいい句である。そんな句に今月も出会えた。

満天の星を制して浮かぶ月 あつ子

名月を賞してびつたりの句ですね。太陽に照らされ輝く月に、秋の夜の思いが広がります。

しかし、です。月は、水のない世界。月は、灰色の世界。月の石は、灰色のものばかり。一方、地球の石は、いろいろどり。

その訳は、地球が水の星だからです。マグマから生まれた石が水で変成して出来た石、水の流れて堆積した石、生き物に由来する石など、「いろいろどり地球の石は水の花」です。名月や地球の石は水の花。

水平線の彼方私の夢続く ふみ子

この句に、「海の向こうに何かがあると思った」遠い昔が蘇ってきました。

四国山脈のふもとに育った私は、小学校に入るまで海を見たことがありませんでした。夏休み、まだ夜も明けきらぬ暗いうちに、集落の大人や子ども二十数名が幌を付けた製材所のトラックの荷台に乗りこみ、声も立てず（なぜだかわかりますか）、松山市の瀬戸内海に面した海水浴場に向かいました。今思えば内海に過ぎない海ですが、初めて海という途轍もない水の広がりを見て、この果てには何かがあるのかと思つたような気がします。

三年の空白会えはずぐ埋まる 加代

三年を越えた新型コロナウイルスの猛威は、川柳会の活動にも大きな制約を加えました。一堂に会してこそその句会であり大会です。まだまだ必要な配慮をしながらですが、ようやく川柳の世界にも日常が戻りつつある喜びをうたいました。

ところで、人と人とのつながりは数十年を越えてもすぐに埋まることはありません。義父の歌です。

四十年振り師を迎えると騒ぎおる
サンパウロ新聞の切抜き届く

義父はブラジルに移民する妹の家族の一員となって海を渡り、二十六歳でブラジル・バストス移住地の校長になりました。昭和八年帰国。実に四十年振りの昭和四十七年、かつての教え子たちに招待されバストスを訪問。一カ月の旅でした。

水が澄むとき真実が見えてくる 柳一

憲法を超えて積み増す武器予算 孝矢
忘れっぽい神話だいき原子力 孝矢

時事川柳三句。一句目、深読みかもしれませんが返句、「水澄んで五輪の闇の底が見え」。二句目、ある政治学者の言葉、「もはや戦後ではない戦前である」。三句目、スリーマイル（一九七九年）、チェルノブイリ（一九八六年）、

三度目はフクシマかとテレビにくぎ付けたとなった原発事故から十二年。「安全の神話が水に流される」ことへの不安がぬぐい切れないと、声高な再稼働論議を憂い、唾う。

一人来て風とおんおん泣き通す 正敏
ほほ笑んでごらん哀しみ消えるから

正敏

人生の余熱で今も生きている 遊石
なにひとつ心配のない不幸せ 良雄
生きてきた日数よりも多い嘘 閑磔
花の頃過ぎても来ない僕の春 富清

喜び・かなしみ・笑い・怒り、大小さまざまな感動のこころ模様をうたう川柳。それぞれへの返句。

一句目へ、ふる里の山はとことん泣けという。二句目へ、かなしみを燃やせば心あたたまる。三句目へ、生きるのが苦手な人の手が温い。四句目へ、生きてゆく叶えば消える夢抱いて。五句目へ、取り返しつく嘘ならば百万遍。そして、六句目へ、大丈夫、この道のように曲がって春は来る。
川柳っていいですね。